女性の知識へのアプローチの分野では、福音主義の結婚観とユマニスムの教育観は協力した。エラスムスにとっては、実際、結婚が合法的であり、望ましく、快適であることを証明するだけでは十分ではない。良い結婚の条件を解明し、結婚の規律を示し、夫婦を教育し、彼等の結婚を成功させなければならなかった。

ところで、結婚成功の条件の一つは、花嫁の訓育である。それは結婚前に始まる。ルターによれば、「妻が家事をし、子供をキリスト教的に養育する」ためには、娘達のために学校が必要であった。

しかし、ルターはそこに留まる。家庭内における女性の働きの有効性を十分に知っていたとしても、精神の領域における働きを決して彼女に与えなかった。女性訓育の目的では、エラスムスとヒーヴェスはルターと基本的には一致しているが、彼等はさらに前に進んでいる。ユマニストたちが推賞する理想は、まさに、家族の父親 pater familias を補佐する家庭の女性 mulier domestica である。[19]

『キリスト教的結婚教育』の1つ章において、エラスムスは結婚に入ることを望む若い女性に適した行動、つまり、織ることと学ぶことをとりあげている。結婚に関しては、知的教育はその一部となっている。「文学は良い教えにより、娘の精神を訓練し、徳を愛させる」とエラスムスは述べている。[20] 花嫁は、何よりも第一に、まず徳がなければならない。

エラスムスとヒーヴェスは、16世紀に女性の教育を擁護したすべての人々と同様、女性が知識を得ることにより悪に、より正確には、不道徳に陥るという偏見（とくに、ドリュサックの主張[21]）を否認している。もしも男性が「文学の知識」によって善くなるとしたら、なぜ博識が女性の誠実さや徳を損なうのかと、ヒーヴェスはクリスチーヌ・ド・ピザンに続いて問うている。1521年9月の手紙で、エラスムスは彼の友、トーマス・モア[22]が娘の教育において遵守している原則をギヨーム・ビュデ[23]に示している。

「今日まで、ほとんどすべての人々は純潔と良き評判のためには、文学的教養は女性にとって不要であると思っていました。かつて、私自身もこの意見からそんなに離れてはおりませんでしたが、その考えをモアが完全に追放してくれました。...」[24]

エラスムスによって要約されている伝統的な推論や彼の反駁に対して17世紀は何物も付け加えないであろう。女性の敵も味方も、彼等の陣営に留まっている。ビュデ宛ての手紙のこの一節は、モリエールの『女房学校』[25] のような戯曲やスカロンの『無益な用心』[26] のような小説の萌芽を宿している。

知識は女性を不道徳に導くと幾度となく主張した先人たちに対して、ユマニストたちは知識は徳に導くという彼等のお気に入りの主題の一つを女性に適用することを躊躇しなかった。しかしながら、知識と女性との間に伝統的に打ち立てられた紐帯を廃止はしない。彼等はそれをただ逆にした。というのは、徳は女性にとって特別な意味を持っているからである。つまり、徳は純潔や羞恥と同一視される。女性の知識探究が向かわなければならないのは、なによりもこの徳である。

娘たちにとっては、羞恥心を保持するには、学習以外、何物も有用ではない。少なくとも、学習がうまく用いられるならば、「良俗を教え、生活を整え、良識を教え、カトリック教徒として生きることを教える知恵の学習」のみに、女性は専念すべきであとヒーヴェスは確言する。

良俗の腐敗でしかない「恋愛」とか「戦闘」の書物は女性には禁止されるべきである。しかし、「良い模範や賞賛すべき話を読書すること」によって、悪徳を憎悪させ、羞恥心、純潔、その他

19) MACLEAN (I.), *Renaissance notion of woman,* pp. 56–60.
20) ERASME, *Le Mariage chrétien, p. 107.*
21) Cf. 研究ノート「女性と知識」(1)『社会学部紀要』第78号，
22) Thomas MORE (1478–1535) イギリスの政治家。
23) Guillaume BUDÉ (1467–1540) フランスのユマニスト。
24) ERASME, lettre à Budé, traduite par M. M. de LAGARANDERIE.
25) MOLIÈRE (1522–1673) *École des femmes*
26) *La Précaution inutile*